全校体制で推進する子どもによる子どものための学級づくり

子どもたちが自ら学級づくりに参画する、新たな学級経営システム「学級力向上プロジェクト」（開発者：早稲田大学教職大学院教授田中博之先生）。いじめがない、安心できる学級づくりに向けて、実践する学校も増えています。5回目の今回は、学級の立て直しに向けて、全校体制で学級力向上プロジェクトを導入して3年目の愛知県知立市立八ツ田小学校の取り組みをご紹介します。

居心地の良い学級風土づくりに向けて

知立市立八ツ田小学校は2016年度から「居心地の良い学級風土をつくる」ことを目標に、学級力向上プロジェクトを実践しています。原田悦子校長先生自らが、導入の旗振り役を務めました。

導入以前の同校は、学級運営に大きな課題を抱えていました。子どもたちは各教員の指導法や性格を見て取り、「この先生は厳しく指導しない」ということが分かると、とたんに学級の規律が緩んでしまう状況にあったのです。授業中に立ち歩いたり、中途で教室を抜け出す児童も現れ、安心して授業を行う雰囲気に欠けた学級もありました。

この課題解決の取り組みとして原田校長先生が注目したのが学級力向上プロジェクトでした。2015年12月、学校に送付された「学級力向上研究会中部部会」（以下、中部部会）設立の案内状がその契機になったといいます。

「落ち着きのない学級を立て直すためには、子どもたち自身が主役となって、みんなで主体的に集団の質を上げるよう努力する必要がある。そう思っていた矢先に、案内状に記された『子どもによる子どものための学級づくり』という言葉を目にして、これだ、と思ったのです」（原田校長先生）

早速、同校の8名の教員を伴って、第1回の中部部会の会合（2016年1月開催）に参加した原田校長先生。学級力アンケートによる状況把握、それを踏まえた話し合い活動（スマイルタイム）、的確な課題解決行動（スマイル・アクション）の推進といった学級力向上プロジェクトの一連の手法を学びました。

原田 悦子校長先生

全校で取り組むための支援体制を構築

同校では、翌2016年度から、学級力向上プロジェクトを基にした学級づくりがスタートしました。プロジェクトを実際にけん引したのは、同校「学級力部会」の部会長を務める川畑研先生です。川畑先生はまず受け持ちの3年生を中心に、学年単位で取り組みを開始し、それをベースに、夏休み明けから学校を挙げた実践へと発展させました。

川畑先生が特に力を入れたのが、学校全体で推進するための支援体制の整備でした。自ら講師となって学級力向上プロジェクトを取り入れた研究授業を公開したほか、スマイルタイムの進め方をまとめたマニュアルも作成。併せて教員同士で、プロジェクトの進め方などについて月に1度、意見交換する「スマイルミーティング」も制度化（現在は日常的に意見交流する方式に移行）するなど、教員が安心して取り組める体制づくりを進めました。

中でも有効だったのが、各学級の取り組み内容の共有です。それぞれが進めたスマイル・アクションの内容をカードにまとめ、それらを「スマイルブック」として1冊に集約し、各学級に配布しました。それにより、教員も、そして子どもたちも、学校全体でどのようなアクションが行われているのか、把握できるようになりました。

活動時間をいかに確保するか

一方で、英語や道徳の教科化に伴い、授業時数の確保が課題となる中、学級力向上プロジェクトの活動時間の充実に向けても工夫を重ねました。当初は45分の授業時間を使って、話し合い活動を行っていたものの、2017年度からはカリキュラム・マネジメントの観点から、始業前の「さわやかタイム」（15分）を活用する方針に変更。スマイルタイム週間を設定した今年度は、1週間（15分×5回）にわたって、全学級で同じ週に話し合い活動を進め、全校で足並みを揃えています（年間これを6セット実施）。

「スマイルタイムの時間を、15分ずつに分割して1週間、話し合いを続けることで、子どもたちは自分で問題をリサーチしたり、深く突き詰めて考える時間を持てるようになったりして、話し合いの内容もより充実したものになりました。学校の状況にあわせて、プロジェクトの進め方を柔軟に変更することで、無理のない形で進めることができています」

同校のスマイルブック。「タイトル」「目標」「やり方」「チェック（注意点）」を記した「スマイルアクションカード」をクリアファイルに集約。誰でも自由に内容を見ることができる。カードは全部で 70 枚以上に及ぶ。

学校の組織力も上がった

学級力向上プロジェクトを進めて、今年で3年目。その効果は目覚ましいものがあると原田校長先生は言います。

「話し合い活動を継続することで、子どもたちは、教員や友だちの意見によく耳を傾けるようになり、授業の集中力も上がりました。毎年2月に行われる『教研式標準学力検査』では、国語・算数いずれの教科でも約10ポイント向上した学年があります。さらに、話し合いを通じて、子どもたちにクラスの一員としての意識が芽生え、教室徘徊などの問題行動を起こす子どももいなくなり、安心して授業を受けられる雰囲気が形成されてきました」

さらに原田校長先生にとってうれしいのが、積極的に自分の意見を発表する子どもが増えたことだといいます。「毎月行う全校朝会で、私は壇上から子どもたちに質問して発言を促すようにしています。すると、多くの子どもたちが手を挙げて、発表するようになりました。明らかに学級、学校の風土が変わってきたと実感しています」

加えて、学校全体でプロジェクトを進めたことのメリットも感じているとのこと。「学級単体で取り組みを行っても、それを継続しなければ、せっかくの成果も一時的なものにとどまってしまいます。統一したプロジェクトの手法を、全学級で毎年繰り返すことで、話し合い活動の質も上がり、有効性がより高まるのです」

同時に、学級力向上プロジェクトは教員にもよい影響をもたらしているようです。「ベテラン教員はこれまでの指導を振り返る機会となりましたし、ミドルリーダーの育成にもつながりました。全教員で取り組んだことでチームとしての学校の組織力が向上したと思います」

最後に原田校長先生に今後の目標について伺うと「2019年10月31日に、学級力向上プロジェクトをテーマとする研究発表会を行うことが決まっています。学級力の取り組みを継続して、研究発表会では子どもたちの成長の様子を広く発信したい」と答えてくれました。

書く取り組みは、すべてはがき新聞で

学級力向上プロジェクトの導入以来、スマイル・アクションの一環としてはがき新聞の作成に力を入れてきた八ツ田小学校。今年の夏休み明けからは、学校で行う「書く」取り組みは、すべてはがき新聞を活用することに。「国語は原稿用紙、社会はプリント、算数はノートの下、という形で形式がばらばらだと、子どもたちは書くことに抵抗感を覚えます。その点、はがき新聞に形式を統一することで、子どもたちは意欲的に書くことができるし、繰り返し作成することで、自然と文章を書く力も向上します」（原田校長先生）

学区内の福祉施設のイベント時に、児童のはがき新聞を掲示